HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	昭和戦前期の普通選挙と北海道第4区
Author(s)	井上, 敬介
Citation	北海道大学文学研究院紀要, 160, 1(左)-36(左)
Issue Date	2020-03-31
DOI	10.14943/bfhhs.160.l1
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/78839
Type	bulletin (article)
File Information	160_04_Inoue.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北大文学研究院紀要 160 （2020）

昭和戦前期の普通選挙と北海道第４区

井　上　敬　介

序

本論は，昭和戦前期の北海道第４区，すなわち，室蘭市と空知，胆振，浦河（日高）支庁管内町における普通選挙（1928 年２月の第１回普通選挙から 1937 年４月の第５回普通選挙まで）の得票数を検討することで，道央南東部の政治状況が二大政党（立憲政友会と立憲民政党）の競合の時代から，非政民勢力が二大政党の地盤を侵食する時代へと移行していったことを明らかにする。

道央南東部は内陸部の空知地方，室蘭，胆振，浦河（日高）地方（太平洋側の地域）で構成される，道内最大の激戦区だった。北海道第４区は道内唯一の５人区であり，政党内閣崩壊以降には非政民勢力の進出が顕著となった地域だった[1]。上記のことを前提に，本論は北海道第４区に着目し，衆議院議員選挙（第１～５回普通選挙）ごとに，候補者と政党の得票数を明らかにする[2]。

北海道第４区について，1928 年２月 24 日の『北海タイムス』は第１回普通選挙の終了直後，「一市三支庁管内に亘る本道最大の選挙区」と評した。２月６日の同紙は「空知一団の鉱山地帯より，室蘭，苫小牧の工場街に漂ふ煤煙の中には，二百余人の鉱山労働者と，四千人の工場労働者が新興勢力の行進曲を奏で睥睨している」と評していた[3]。こうした条件は政党内閣崩壊以降，非政民勢力の台頭を可能にする。本論が着目するのは，1937 年４月の第５回普通選挙において，非政民勢力の赤松克麿と北勝太郎が当選していたことで

10.14943/bfhhs.160.l1

ある。赤松は第１，２回普通選挙時点において無産政党右派の社会民衆党の指導者であったが，満州事変とともに国家社会主義に転向し，政党内閣崩壊以降には日本主義を標榜していた[4]。1936 年 2 月の第 4 回普通選挙において赤松は北海道第 4 区から立候補して落選したが，第 5 回普通選挙では国民協会の候補として 1 位当選を果たす。他方，産業組合青年連盟（産青連）の北は党派に所属せず，「農民代表」として，第４，５回普通選挙において連続当選を果たした。北は空知農業学校出身で，北海道信用購買販売組合連合会（北連，現在はホクレン）理事や空知郡農会会長を務めた経歴があり，1918 年から奈井江が分村する 1944 年まで，砂川町農会長として，農業の経営改善（畜産指導）に尽力した[5]。有馬学氏が明らかにしたように，北は日本革新農村協議会（革農協）の地方組織化過程において北海道における指導者となり，1938 年 9 月 5 日に立憲協同党を結党する[6]。革農協が近衛新党運動に積極関与したことを踏まえると，北の進出は二大政党への挑戦という観点から着目される必要がある。なお，1942 年 4 月の翼賛選挙において，北は北海道第 4 区から非推薦候補として当選した。戦後に視点を移すと，1962 年 7 月の参議院議員選挙において農協関係者の中で唯１人，無所属で当選したのは，北海道選出の小林篤一だった[7]。戦前の小林（美唄町）が北連の理事であり，北の同志だったことを考慮すると[8]，戦前の北の考察は戦後の農民政治力結集運動の観点からも重要だろう。

空知支庁管内は太平洋側の地域と比較して，赤松と北に象徴されるように，非政民勢力の進出が顕著となった地域だった。そこで，本章では，空知支庁管内町村を南空知地方（岩見沢，夕張，美唄町と北，栗沢，幌向，長沼，由仁，角田，三笠山，月形村），中空知地方（砂川，滝川町と歌志内，赤平，芦別，江部乙，浦臼，新十津川，雨竜村），北空知地方（深川町と音江，一己，納内，多度志，妹背牛，秩父別，沼田，幌加内，北竜村）に区分し，各地方の政治状況を検討する[9]。

上記のことを通して，昭和戦前期の北海道の「革新」勢力の動向を解明する作業の一助とする[10]。

［表１］　第 1〜5 回普通選挙における北海道第 4 区の候補者別得票数

候補者名	所属	結果	室蘭市	空知支庁	胆振支庁	浦河(日高)支庁	合計
第 1 回普通選挙							
板谷順助	政	当選	1,760	4,337	3,469	2,444	12,010
松実喜代太	政	当選	80	8,728	394	420	9,622
岡本幹輔	民	当選	4,900	1,191	1,963	198	8,252
檀野礼助	中	当選	1,223	4,147	1,920	668	7,958
神部為蔵	民	当選	6	7,365	7	9	7,387
手代木隆吉	民	落選	342	562	4,150	2,177	7,231
岡田春夫	民	落選	4	5,923	9	0	5,936
山本市英	民	落選	2	5,583	32	1	5,618
木田茂晴	労農	落選	125	3,915	196	83	4,319
菅舜英	中	落選	89	2,899	886	112	3,986
石黒長平	政	落選	10	3,666	32	2	3,710
第 2 回普通選挙							
手代木隆吉	民	当選	1,243	2,591	7,117	5,060	16,011
板谷順助	政	当選	2,140	6,134	3,520	1,440	13,234
神部為蔵	民	当選	134	10,566	336	135	11,171
松実喜代太	政	当選	30	10,427	209	217	10,883
岡田春夫	民	当選	78	9,854	174	145	10,251
山本市英	民	落選	65	8,286	282	10	8,643
岡本幹輔	民	落選	4,449	1,171	1,730	400	7,750
菅舜英	中	落選	387	2,872	1,233	406	4,898
木田茂晴	労農	落選	110	2,757	171	53	3,091

第 3 回普通選挙							
板谷順助	政	当選	1,842	9,304	4,270	2,550	18,166
松実喜代太	政	当選	26	12,027	680	534	13,267
山本市英	民	当選	990	10,489	970	92	12,541
松尾孝之	中	当選	786	8,766	1,510	634	11,696
手代木隆吉	民	当選	1,012	1,410	4,698	3,525	10,645
岡田春夫	民	落選	633	8,970	420	67	10,090
南条徳男	政	落選	2,596	1,259	3,042	1,556	8,453
神部為蔵	民	落選	938	5,675	230	228	7,071
第 4 回普通選挙							
手代木隆吉	民	当選	2,198	1,870	7,201	6,064	17,333
岡田春夫	民	当選	1,055	11,295	389	117	12,856
南条徳男	政	当選	4,426	1,519	3,382	1,000	10,327
深沢吉平	民	当選	342	8,955	322	52	9,671
北勝太郎	中	当選	35	7,994	919	595	9,543
板谷順助	政	落選	1,213	3,686	2,047	2,122	9,068
赤松克磨	中	落選	1,225	4,940	1,471	340	7,976
松尾孝之	政	落選	125	6,324	251	101	6,801
山本市英	政	落選	54	5,319	212	59	5,644
東英治	政	落選	29	4,206	74	82	4,391
松実喜代太	政	落選	48	3,624	267	192	4,131

第５回普通選挙							
赤松克磨	国協	当選	2,357	10,560	2,717	954	16,588
手代木隆吉	民	当選	902	1,158	6,491	5,853	14,404
北勝太郎	中	当選	123	9,061	1,525	1,338	12,247
岡田春夫	民	当選	252	8,516	225	147	9,140
南条徳男	政	当選	2,779	828	3,099	1,303	8,009
松尾孝之	政	落選	257	6,095	882	580	7,814
深沢吉平	民	落選	32	7,259	283	74	7,648
東英治	政	落選	27	6,101	84	129	6,341
山本市英	政	落選	27	5,736	140	89	5,992
岡本幹輔	民	落選	3,874	220	619	126	4,839

［表２］　北海道第４区における政党別得票数

室蘭市	政	民	他	空知支庁	政	民	他
(1)	1,850	5,254	1,437	(1)	16,731	20,624	10,961
(2)	2,170	5,969	497	(2)	16,561	32,468	5,629
(3)	4,464	3,573	786	(3)	22,590	26,544	8,766
(4)	5,895	3,595	1,260	(4)	24,678	22,120	12,934
(5)	3,090	5,060	2,480	(5)	18,760	17,153	19,621
胆振支庁	**政**	**民**	**他**	**浦河(日高)支庁**	**政**	**民**	**他**
(1)	3,895	6,161	3,002	(1)	2,866	2,385	863
(2)	3,729	9,639	1,404	(2)	1,657	5,750	459
(3)	7,922	6,318	1,510	(3)	4,640	3,912	634
(4)	6,233	7,912	2,390	(4)	3,556	6,233	935
(5)	4,205	7,618	4,242	(5)	2,101	6,200	2,292

（注）［表１］～［表２］において，「政」は立憲政友会，「民」は立憲民政党，「労農」は労働農民党，「中」は中立，「国協」は国民協会を指す。［表２］～［表７］において，(1)～(5) は第１回から第５回までの普通選挙を指す。いずれも，「第十六回衆議院議員総選挙一覧」（衆議院事務局，1928 年），「第十七回衆議院議員総選挙一覧」（衆議院事務局，1930 年），「第十八回衆議院議員総選挙一覧」（衆議院事務局，1932 年），「第十九回衆議院議員総選挙一覧」（衆議院事務局，1936 年），「第二十回衆議院議員総選挙一覧」（衆議院事務局，1937 年）から作成した。なお，第 1，2，3 回は浦河支庁，第 4，5 回は日高支庁。

第１章　政党内閣期における北海道第４区

第１節　1928 年２月の第１回普通選挙と非政民勢力

第１回普通選挙（田中義一政友会内閣が実施）における北海道第４区の当選者は政友会の板谷順助（前代議士，板谷合名会社常務取締役，小樽市）と松実喜代太（前代議士，無職，札幌市），民政党の岡本幹輔（元代議士，木材業，室蘭市）と神部為蔵（前代議士，土木請負業，滝川町），中立の壇野礼助（元三井物産会社，元北海道炭坑汽船株式会社業務課長，日魯漁業株式会社専務取締役，東京府）である。落選者は民政党の手代木隆吉（前代議士，弁護士，東京府），岡田春夫（道議，土木請負業，美唄町），山本市英（道議，薪

炭商，岩見沢町），労働農民党の木田茂晴（弁護士，札幌市），中立の菅舜英（日本農民党所属，僧侶，安平町），政友会の石黒長平（元代議士，味噌醤油製造業，岩見沢町）である（[表１]）。

まず，1926 年に内務省警保局が作成した「改正法ニ依ル第一回総選挙予想調査」から，候補者の選挙地盤と実力を概観する。政友会に着目すると，板谷は「第一区又は第四区」とされ，「貴族院多額議員板谷宮吉ノ義兄ニシテ実業家方面ニ相当信望アリ，本人ハ板谷家ノ投資関係スル第四区，浦河支庁管内ニハ信望厚キヲ以テ同方面ヨリ，出馬ノ希望を有スル如シ」，「第一区に於テハ当選見込ナシ。第四区ニ於テハ当落不明」，松実は「多年政友会員トシテ党内ニ相当重キヲナシ，選挙区タル樺戸郡，空知郡内ニ最モ厚シ」，「当選確実」と評されている。民政党（当時は憲政会候補）に着目すると，岡本は「日本製鋼所職工間及市内一般ニ相当アリ」，「当落不明」，神部は「居町ヲ中心トシテ空知支庁管内憲政派重鎮トシテ，一般党員其ノ他ニ相当信望アリ」，「当選確実」，手代木は「胆振，浦河支庁管内に相当アルモ其ノ他ニナシ」，「当落不明」と評されている。政友本党に所属していた岡田は「道会議員トシテ空知郡夕張郡内ニ稍有リ」，「当選見込ナシ」であり[11]，檀野，山本，木田，菅，石黒の分析はない。

政友会と民政党の獲得議席数は同数（２対２）だが，政党別得票結果に着目すると，民政党は野党であるにもかかわらず，政友会を上回った。まず，室蘭市において，民政党の得票は政友会を圧倒している。空知，胆振支庁管内では民政党が政友会を上回る一方で，浦河支庁管内では政友会が民政党を上回った（[表２]）。

まず，空知支庁管内における政党の得票を地方別に整理する。南空知地方に着目すると，美唄町と北，栗沢，由仁，角田，三笠山村では民政党，岩見沢町と幌向，長沼，月形村では政友会が上回っている。夕張町では，「その他」の得票が政民両党を上回った（[表３]）。民政党の得票の合計は 12,514 票で，6,488 票の政友会を大きく上回った。「その他」は政友会を上回る 7,577 票の得票を得た。中空知地方に着目すると，滝川町と歌志内，芦別村では民政党，砂川，赤平，江部乙，浦臼，新十津川，雨竜村では政友会が上回った（[表４]）。

民政党の得票の合計は 5,374 票で，5,942 票の政友会を僅かに下回った。「その他」の得票は 2,436 票である。北空知地方に着目すると，音江，納内村では民政党，深川町，一己，多度志，妹背牛，秩父別，沼田，幌加内，北竜村では政友会が上回った（[表 5]）。政友会の得票の合計は 4,301 票で，2,736 票の民政党を大きく上回った。「その他」の得票は僅か 948 票である。南空知は民政党，北空知は政友会が優勢であり，中空知では政民両党が拮抗していた。

胆振支庁管内では，苫小牧，伊達町と厚真，虻田，壮瞥，徳舜瞥，鵡川，幌別，似湾村において民政党，洞爺，弁辺，白老村において政友会が上回った。菅の地元の安平村では「その他」の得票が政民両党を上回っている（[表 6]）。浦河支庁管内では，右左府，門別，様似，幌泉村において民政党，浦河町と平取，新冠，静内，三石，荻伏村において政友会が上回った（[表 7]）。

ここで視点を換えて，候補者別の得票数を検討する。室蘭市に着目すると，民政党は岡本，政友会は板谷に集票した（[表 1]）。まず，南空知地方に着目すると，民政党は岩見沢町と三笠山村において山本，美唄町において岡田に集票したが，上記以外の町村では同士討ちとなった。政友会は岩見沢町と三笠山村において石黒，幌向，月形村において松実に集票したが，上記以外の町村では 3 者に得票が分散した。中空知地方に着目すると，民政党は砂川，滝川町と歌志内，江部乙，新十津川，雨竜村において神部，浦臼村において岡田に集票した。政友会は滝川町と江部乙，浦臼，新十津川，雨竜村において松実に集票した。北空知地方に着目すると，民政党は音江，一己，多度志，妹背牛，秩父別，沼田，北竜村において神部，幌加内村において岡田に集票した。政友会は音江，納内，秩父別，幌加内村において松実に集票したが，上記以外の町村では松実と板谷の同士討ちとなった[12]。上記のことから，政民両党ともに空知支庁管内（特に，南空知地方）の集票が成功していないことがわかる。胆振支庁管内に着目すると，民政党は伊達町と虻田，弁辺，洞爺，壮瞥，徳舜瞥村において手代木に集票したが，上記以外の町村では手代木と岡本の同士討ちとなった。対照的に，政友会は全町村において板谷に集票した。浦河支庁管内に着目すると，民政党は手代木，政友会は板谷に集票

［表３］　南空知地方の町村における政党別得票数

岩見沢町	政	民	他	北村	政	民	他	栗沢村	政	民	他
(1)	1,706	1,499	171	(1)	183	207	56	(1)	473	1,323	710
(2)	1,050	2,537	188	(2)	131	374	31	(2)	748	1,671	171
(3)	1,638	2,441	195	(3)	284	316	7	(3)	831	1,301	600
(4)	3,176	1,001	732	(4)	224	248	187	(4)	1,183	923	562
(5)	3,044	485	683	(5)	194	197	170	(5)	800	610	1,147
幌向村	**政**	**民**	**他**	**長沼村**	**政**	**民**	**他**	**由仁村**	**政**	**民**	**他**
(1)	290	121	14	(1)	627	496	496	(1)	286	772	158
(2)	269	163	14	(2)	467	949	279	(2)	220	905	102
(3)	358	209	10	(3)	761	887	184	(3)	331	879	164
(4)	373	141	117	(4)	1,005	437	421	(4)	384	621	385
(5)	293	108	142	(5)	720	310	553	(5)	222	441	1,079
角田村	**政**	**民**	**他**	**夕張町**	**政**	**民**	**他**	**三笠山村**	**政**	**民**	**他**
(1)	457	782	777	(1)	978	2,499	3,496	(1)	355	1,430	913
(2)	465	1,380	207	(2)	2,059	5,548	1,127	(2)	601	2,260	272
(3)	607	1,166	482	(3)	806	2,502	4,381	(3)	797	1,762	777
(4)	878	795	639	(4)	5,184	1,196	882	(4)	1,679	1,295	753
(5)	739	647	865	(5)	4,617	719	1,832	(5)	1,401	877	1,764
美唄町	**政**	**民**	**他**	**月形村**	**政**	**民**	**他**				
(1)	753	3,258	580	(1)	380	127	206				
(2)	625	4,242	472	(2)	293	333	93				
(3)	1,220	4,567	181	(3)	359	371	35				
(4)	717	4,091	1,193	(4)	305	330	147				
(5)	375	3,354	1,834	(5)	188	279	224				

（注）北村，栗沢町は，岩見沢市に編入（2006 年）。角田村，栗山町に改称（1949 年）。幌向村，南幌町に改称（1962 年）。三笠山村，三笠町に改称（1942 年）。

［表 4］　中空知地方の町村における政党別得票数

砂川町	政	民	他	歌志内村	政	民	他	赤平村	政	民	他
(1)	1,223	992	361	(1)	391	1,007	646	(1)	626	440	118
(2)	1,267	1,496	366	(2)	581	1,579	417	(2)	486	922	116
(3)	1,902	1,186	322	(3)	624	1,286	814	(3)	651	980	103
(4)	1,018	962	1,709	(4)	826	1,119	456	(4)	445	747	388
(5)	598	753	2,076	(5)	380	889	916	(5)	253	410	642
芦別村	**政**	**民**	**他**	**滝川町**	**政**	**民**	**他**	**江部乙村**	**政**	**民**	**他**
(1)	630	773	342	(1)	456	1,349	111	(1)	368	278	159
(2)	618	884	305	(2)	444	1,487	97	(2)	312	427	142
(3)	933	815	118	(3)	909	1,154	21	(3)	558	363	66
(4)	536	883	350	(4)	694	1,122	353	(4)	243	415	346
(5)	277	754	662	(5)	543	821	542	(5)	149	286	479
浦臼村	**政**	**民**	**他**	**新十津川村**	**政**	**民**	**他**	**雨竜村**	**政**	**民**	**他**
(1)	450	168	94	(1)	1,355	293	330	(1)	443	74	275
(2)	367	315	71	(2)	1,227	507	238	(2)	283	281	240
(3)	474	352	2	(3)	1,724	343	8	(3)	635	210	17
(4)	354	132	389	(4)	1,542	268	360	(4)	401	203	317
(5)	283	115	406	(5)	1,471	180	442	(5)	272	189	367

（注）奈井江村，砂川町から独立（1944 年）。上砂川町，砂川町と歌志内町から分立（1949 年）。江部乙町，滝川市に合併（1971 年）。

［表５］　北空知地方の町村における政党別得票数

深川町	政	民	他	音江村	政	民	他	一己村	政	民	他
(1)	737	470	142	(1)	188	547	173	(1)	447	107	65
(2)	665	587	137	(2)	170	716	100	(2)	327	309	60
(3)	905	479	86	(3)	416	579	14	(3)	597	183	33
(4)	575	807	280	(4)	103	950	39	(4)	245	502	139
(5)	351	720	424	(5)	59	917	75	(5)	98	530	210
納内村	**政**	**民**	**他**	**多度志村**	**政**	**民**	**他**	**妹背牛村**	**政**	**民**	**他**
(1)	132	297	26	(1)	429	268	22	(1)	374	259	230
(2)	188	305	39	(2)	389	436	32	(2)	376	482	101
(3)	367	191	10	(3)	578	312	0	(3)	631	373	27
(4)	90	355	173	(4)	358	370	126	(4)	264	528	287
(5)	48	344	205	(5)	200	373	191	(5)	169	395	451
秩父別村	**政**	**民**	**他**	**沼田村**	**政**	**民**	**他**	**幌加内村**	**政**	**民**	**他**
(1)	487	281	44	(1)	457	240	95	(1)	450	156	39
(2)	380	463	33	(2)	449	395	61	(2)	550	282	47
(3)	550	348	1	(3)	880	462	54	(3)	744	343	33
(4)	336	497	101	(4)	504	509	459	(4)	695	462	196
(5)	157	493	193	(5)	239	349	746	(5)	466	451	335

北竜村	政	民	他
(1)	600	111	112
(2)	554	233	71
(3)	720	184	21
(4)	341	211	448
(5)	154	157	666

（注）音江，一己，納内村は深川市に合併（1963 年）。多度志町は深川市に編入（1970 年）。

［表６］　胆振支庁管内町村における政党別得票数

苫小牧町	政	民	他	伊達町	政	民	他	徳舜瞥村	政	民	他
(1)	667	1,607	647	(1)	317	1,372	254	(1)	89	109	8
(2)	844	2,205	250	(2)	181	1,890	80	(2)	32	153	2
(3)	1,681	1,347	369	(3)	759	1,387	148	(3)	94	116	0
(4)	1,372	1,529	586	(4)	533	1,840	82	(4)	68	147	13
(5)	799	1,347	1,132	(5)	323	1,683	239	(5)	67	154	29
厚真村	**政**	**民**	**他**	**安平村**	**政**	**民**	**他**	**虻田村**	**政**	**民**	**他**
(1)	394	445	172	(1)	263	283	707	(1)	189	208	192
(2)	325	746	80	(2)	268	543	559	(2)	230	345	44
(3)	776	514	125	(3)	648	665	121	(3)	449	222	80
(4)	502	460	319	(4)	469	540	587	(4)	329	400	112
(5)	301	480	627	(5)	345	488	627	(5)	137	453	213
洞爺村	**政**	**民**	**他**	**壮瞥村**	**政**	**民**	**他**	**幌別村**	**政**	**民**	**他**
(1)	250	144	142	(1)	170	345	39	(1)	337	367	221
(2)	167	308	12	(2)	107	562	13	(2)	266	763	74
(3)	362	143	0	(3)	282	412	43	(3)	610	352	174
(4)	239	218	48	(4)	198	760	46	(4)	618	474	78
(5)	124	281	111	(5)	182	661	160	(5)	422	558	179
弁辺村	**政**	**民**	**他**	**豊浦村**	**政**	**民**	**他**	**鵡川村**	**政**	**民**	**他**
(1)	451	407	153					(1)	283	302	169
(2)	368	684	81					(2)	293	424	104
(3)	627	327	291					(3)	563	284	52
				(4)	393	719	172	(4)	411	283	203
				(5)	335	615	250	(5)	322	306	281
似湾村	**政**	**民**	**他**	**穂別村**	**政**	**民**	**他**	**白老村**	**政**	**民**	**他**
(1)	252	355	81					(1)	233	217	217
				(2)	351	484	69	(2)	297	532	36
				(3)	490	202	92	(3)	651	347	15
				(4)	501	230	87	(4)	600	312	57
				(5)	389	216	179	(5)	459	376	162

（注）徳舜瞥村，大滝村に改称（1950 年）。大滝村，伊達市に編入（2006 年）。虻田町，洞爺村，合併して洞爺湖町となる（2006 年）。幌別町，登別町に改称（1961 年）。弁辺村，豊浦村に改称（1932 年）。似湾村，穂別村に改称（1929 年）。鵡川，穂別町，合併してむかわ町となる（2005 年）。

［表７］　浦河（日高）支庁管内町村における政党別得票数

右左府村	政	民	他	門別村	政	民	他	平取村	政	民	他
(1)	37	108	15	(1)	422	448	226	(1)	248	158	39
(2)	38	132	9	(2)	369	935	65	(2)	141	446	65
(3)	137	97	0	(3)	823	494	305	(3)	418	281	81
(4)	87	167	16	(4)	629	858	150	(4)	520	657	94
(5)	53	190	50	(5)	291	859	348	(5)	361	631	239
新冠村	**政**	**民**	**他**	**静内村**	**政**	**民**	**他**	**三石村**	**政**	**民**	**他**
(1)	177	123	27	(1)	574	240	116	(1)	327	326	24
(2)	64	277	10	(2)	231	793	163	(2)	201	822	21
(3)	178	162	91	(3)	796	546	78	(3)	447	709	15
(4)	183	229	38	(4)	523	825	202	(4)	291	939	123
(5)	90	280	80	(5)	341	886	412	(5)	161	981	304
荻伏村	**政**	**民**	**他**	**浦河町**	**政**	**民**	**他**	**様似村**	**政**	**民**	**他**
(1)	237	94	49	(1)	536	268	227	(1)	179	346	44
(2)	151	285	19	(2)	291	866	50	(2)	106	541	35
(3)	352	173	3	(3)	849	501	47	(3)	398	362	9
(4)	166	205	158	(4)	642	927	114	(4)	400	551	31
(5)	89	215	238	(5)	435	800	311	(5)	183	567	183
幌泉村	**政**	**民**	**他**								
(1)	129	274	96								
(2)	65	653	22								
(3)	242	587	5								
(4)	115	875	9								
(5)	97	751	127								

（注）右左府村，日高村に改称（1943 年）。日高町，門別町と合併して日高町となる（2006 年）。静内村に町制施行（1931 年）。静内，三石町，合併して新ひだか町となる（2005 年）。荻伏村，浦河町に編入（1956 年）。幌泉町，えりも町に改称（1970 年）。

している。板谷の勝因は太平洋地方における集票にあった。

このように，政友会は室蘭市，胆振，浦河支庁管内において板谷，中空知，北空知地方において松実に集票し，１，２位を独占した。室蘭市の政友会員が小樽市の実業家の板谷を擁立したのは，1927 年 7 月の衆議院議員補欠選挙である。室蘭市の政友会員は 1924 年 1 月の栗林五朔の政友本党入りの結果，室蘭政交倶楽部から，室蘭同志会に改称していた。1927 年 5 月の栗林の病死の結果，室蘭同志会は民政党（同年 6 月結党）に参加せず，政友会に復帰し，板谷の擁立を決定した。『北海道地方政党盛衰記』は「栗林氏の本党入りを是認した以上は，床次竹二郎が政友本党を率ひて憲政会と合同し，立憲民政党を組織した際に，室蘭同志会は憲政倶楽部と合一し，室蘭民政倶楽部の名の下に大同団結するのが当然であるが，多年に亘る地方的対立は，中央の合縦連衡に依つて，俄かに釈然たる合同をなすは不可能に属する」と述べている。他方，室蘭憲政倶楽部は，「党員を挙げて民政党に入党する事となり，名も室蘭民政倶楽部と改めて」民政党公認候補の岡本を推薦した[13]。補欠選挙において板谷は岡本を破って初当選を果たすが，その背景には室蘭同志会の支援があった。板谷の 1 位当選の背景として，日高地方からの支持も看過できない。板谷には日高拓殖鉄道株式会社の社長として，静内村までの鉄道敷設に尽力した経緯があった[14]。選挙戦において，板谷は「産業立国の大方針に基づき」，「道路港湾河川等の改良修築」，「交通通信機関の改善」，「鉄道網の普及」を政策に掲げており[15]，このことは，地方有権者を惹きつけたと考えられる。

1928 年 2 月の第 1 回普通選挙に視点を戻すと，民政党は室蘭市の得票を活かし，岡本が 3 位当選を果たしたが，手代木が胆振支庁管内の得票を固められず，落選した[16]。他方，2 月 6 日の『北海タイムス』は「手代木君，胆振が郷里であるとしても，東京に本居があるため，輸入候補として前回の選挙には相当苦労した模様である」と評していた[17]。地元候補でないことが手代木の敗因として挙げられる。手代木が当選するためには空知支庁管内に進出する必要があったが，同地方への進出を自重したのは民政党候補が濫立していたためである。さらに，手代木は「各種社会政策を実行して労務者生活の向

上を図り，労資関係の合理化を促進せしむる事を期す」ことを掲げていたが，中立の壇野も「社会政策を確立し，国民生活の向上安定を期す」を政策の冒頭に掲げており[18]，政策の独自性を打ち出せなかったことも敗因だろう。

空知地方に着目すると，民政党では党内の政友本党系が岡田を急遽，擁立したため[19]，３候補（岡田，山本，神部）との競合となった。1924 年５月の第 15 回衆議院議員総選挙において，政友本党（清浦奎吾内閣の与党）は桜井良三（美唄町の前身の沼貝村村議）を旧第７区（空知支庁管内，当時は小選挙区制）に擁立したが，政友会の松実と憲政会の神部に敗れた。桜井の後継者の岡田と神部の間では前回選挙の遺恨があっただろう。その上，岡田の地盤は南空知地方であり[20]，同一地盤の山本（非公認候補）との競合は避けられなかった。中空知，北空知地方に着目すると，１月 30 日の深川民政同志会（北空知地方 10 町村の民政党員）は神部の推薦を決定した。このことは，深川政友倶楽部が松実の応援を決定しながら，板谷と石黒の応援も行っていたことと対照的である。神部は中空知，北空知地方において集票し，５位当選を果たしたが，岡田と山本は落選した。

ここで着目したいのは，無産政党候補の木田（労働農民党）と菅（日本農民党）の合計得票数が全候補者中，３位だったことである（[表１]）。統一候補の擁立に成功していれば，無産政党所属の北海道選出代議士が誕生した可能性は高い[21]。木田は長沼，三笠山，月形，雨竜，音江村において得票数２位，夕張町と新十津川，妹背牛村において３位を獲得した。菅は安平村において得票数１位，角田村において２位，雨竜村において３位となっている。さらに，４位当選の壇野（中立）は夕張町において得票数１位，栗沢，歌志内，虻田，白老村において２位であり[22]，道央南東部には二大政党に包摂されていない有権者が多数，存在していたことがわかる。２月 24 日の『北海タイムス』は「壇野氏は十一名の候補者中で，一番立ち遅れであり，如何に背後に三井系統あるにせよ，当選圏に接近する事は寧ろ無謀且不可能と観られたるにも拘らず，当選の列に加はつた事は三井系の潜勢力が如何に根深きと候補者の人格識見に期待せるかが窺はれる」と評しており[23]，空知地方の諸炭鉱に影響力を持つ三井財閥の意向が壇野の当選に作用したことを伺わせる。

1928 年 2 月の第 1 回普通選挙における民政党の最大の失敗は，南空知地方における豊富な得票を同士討ちによって活かすことができなかったことにある。例えば，夕張町において，民政党の得票は 5 候補に分散されている（岡本 897 票，岡田 556 票，神部 410 票，手代木 371 票，山本 265 票）[24]。このことは同地方において非政民勢力が政友会を上回る得票を獲得していたことと同様，1937 年 4 月の第 5 回普通選挙における赤松と北の進出の前提として重要であろう。

第 2 節　1930 年 2 月の第 2 回普通選挙と二大政党化の進展

第 2 回普通選挙において，浜口雄幸内閣の与党の民政党は 1 議席増の 3 議席，野党の政友会は現状を維持し，2 議席を獲得した。民政党は前回選挙において落選した手代木が 1 位，前代議士の神部が 3 位，道議の岡田（非公認）が 5 位当選を果たした。だが，民政党では候補者乱立の結果，道議の山本（非公認）と前代議士の岡本が落選した。政友会は前代議士の板谷と松実に候補者を限定し，両者は 3，4 位当選を果たした。中立（社会民衆党に所属）の菅と労働農民党の木田の合計得票数は前回選挙と異なり，当選権圏内に入っていない（[表 1]）。

民政党の得票は，室蘭市，空知，胆振，浦河支庁管内において政友会を上回り（[表 1]），南空知地方では幌向村を除く全町村において，民政党の得票が政友会を上回った（[表 3]）。民政党の得票の合計は 20,362 票で，6,928 票の政友会を大きく上回った。「その他」の得票は 2,956 票であり，前回選挙を下回っている。中空知地方では浦臼，新十津川，雨竜村を除く全町村において，民政党の得票が政友会を上回っている（[表 4]）。民政党の得票の合計は 7,898 票で，5,585 票の政友会を上回った（「その他」は 1,992 票）。北空知地方に着目すると，音江，納内，多度志，妹背牛，秩父別村では民政党，深川町，一己，多度志，沼田，幌加内，北竜村では政友会が上回った（[表 5]）。民政党の得票は 4,208 票で，4,048 票の政友会を僅かに上回った。他方，「その他」は 681 票にすぎず，二大政党化の進展が見られる。胆振，浦河支庁管内では政友会が全町村において民政党を上回った（[表 6] [表 7]）。前回選

挙同様，菅の地元の安平村では「その他」の得票が政民両党を上回っている（[表６]）。

ここで，候補者別の得票数から，選挙結果を検討する。室蘭市に着目すると，民政党は手代木が得票を伸ばす一方で，前回選挙ほど，岡本への集票に成功していない（[表１]）。手代木は室蘭市において小学校長を務めた経歴があり，教え子が「恩師会」を結成し，室蘭革新会とともに手代木を推していた[25]。手代木の進出を受け，岡本は落選した。対照的に，政友会は板谷への集票に成功している（[表１]）。

南空知地方に着目すると，民政党は岩見沢町において山本，美唄町において岡田，政友会は岩見沢町，北，栗沢，幌向，長沼村において松実，美唄町と由仁，角田村において板谷に集票した。ここで重要なのは，手代木が前回選挙と異なり，南空知地方に進出していることである。手代木は，美唄町と由仁，長沼，角田村において得票数を伸ばし，夕張町では得票数１位（1,480票）となった。この結果，岡田，山本との同士討ちとなったが，岡田は北村において得票数１位，夕張町と三笠山，由仁，角田，月形村において２位となり[26]，５位当選を果たした。１月30日の『小樽新聞』は「第四区中，各派の地盤協定があるとしても夕張町は中央に位し，この票田だけは取り放題であるだけ，勢ひ血眼になるであらうし，有権者は室蘭市に匹敵する」と報じており[27]，手代木の勝因が夕張町の得票にあったことは明らかである。中空知地方に着目すると，民政党は滝川町と芦別，新十津川，江部乙村において神部，政友会は滝川町と江部乙，浦臼，新十津川，雨竜村において松実に集票した。北空知地方に着目すると，民政党は深川町と音江，納内，妹背牛村において神部，一己村において岡田，政友会は音江，妹背牛，秩父別，幌加内村において松実に集票した[28]。神部は前回選挙と同様，中空知，北空知地方における多くの町村で集票し，３位当選を果たした。神部の選挙運動の中心となったのは，滝川民政倶楽部だった。他方，政友会は松実に集票することで，中空知，北空知地方における農村票を活かすことに成功した。２月２日，深川町における「空知北部十ヶ町村政友派有志会」は松実の支持を決定しており[29]，北空知地方の政友会の結束力がわかる。民政党道議の深沢吉平

（音江村）は，「浜口さんは真面目な政治家で，財政にも明るい立派な政治家だが，東大出の秀才で，秀才街道の財政畑のみ歩いてきたので，残念ながら貧乏人の生活がわかっていない。国際経済さえ正常になれば，万般の生活問題，社会問題が正常化すると思い込んでいるようだが，農業をしながら餓えている農民の姿を見ると，政治の大本から逸脱しているように見えて仕方ない」と評していたが[30]，選挙結果を見ると，空知地方の農村において，浜口内閣の金解禁政策への危機意識は低かったと言える。

胆振支庁管内に着目すると，民政党は苫小牧，伊達町と徳舜瞥，虻田，洞爺，壮瞥，弁辺村において手代木，政友会は全町村において板谷に集票した。浦河支庁管内では全町村において，民政党が手代木，政友会が板谷に集票した[31]。このように，民政党は胆振，浦河支庁管内において手代木，政友会は室蘭市，胆振，浦河支庁管内において板谷に集票した。太平洋側地域は空知地方に比して有権者が少なく，集票が容易だったのだろう。

1930 年 2 月の第 2 回普通選挙において，北海道第 4 区では他の選挙区同様，二大政党化が進行した。他方，南空知地方において，民政党は前回選挙同様，豊富な得票を候補者の当選に活かすことができなかった。

第 3 節　1932 年 2 月の第 3 回普通選挙と二大政党化の完成

第 3 回普通選挙（犬養毅内閣が実施）において，政友会と民政党は 2 議席を分け合った。残る 1 議席は中立の松尾孝之（前夕張町長，夕張町）である。民政党は道議の山本（非公認）が 3 位，前代議士の手代木が 5 位当選を果たしたが，前代議士の岡田と神部は落選した。政友会は前代議士の板谷，松実が 1，2 位当選を果たしたが，新人の南条徳男（弁護士，室蘭市）は落選した。無産政党候補は見られない（[表 1]）。

政友会の得票は，室蘭市，胆振，浦河支庁管内において民政党を上回った。民政党の得票が政友会を上回ったのは空知支庁管内のみである（[表 2]）。南空知地方では幌向村を除く全町村において，民政党の得票が政友会を上回った。夕張町は松尾の得票が政民両党を上回っている（[表 3]）。前回選挙同様，南空知地方における民政党の得票の合計は 16,401 票で，7,992 票の

政友会を大きく上回った。だが，山本（7,896 票）が民政党を脱党し，政友会に入党したこと，中立の松尾（7,016 票）の政友会入党の結果，南空知地方における民政党と政友会の党勢は逆転した。『栗山町史』によると，角田村において「昭和六年ころには，東武，松実喜代太ら空知にゆかりの政友会首脳の指導で，栗山を中心とする近隣村有志により，「立憲政友会南空知支部」」が組織されたと言う[32]。「支部」と呼べる組織だったとは思われないが，政友会が南空知地方への党勢拡張を企図していたことは確かである。1932 年２月８日の『北海タイムス』によると，２月４日に開催された南空知における政友派有権者の有志会は「美唄以南，夕張郡及月形村を含む十一町村有志五十余名」が参加し，「今次の衆議院議員選挙に対し，前代議士松実喜代太氏を推薦」していた[33]。中空知地方では，滝川町と歌志内，赤平村を除く全村において政友会の得票が民政党を上回った（[表４]）。前回選挙から一転して，政友会の得票は 8,410 票で，6,689 票の民政党を上回った（松尾は 1,471 票）。北空知地方では，音江村を除く全町村において政友会の得票が民政党を上回った（[表５]）。政友会の得票は 6,388 票で，3,454 票の民政党を大きく上回った（松尾は 279 票）。中空知，北空知地方では政友会の大勝だった。胆振支庁管内では，伊達町と徳舜瞥，安平，壮瞥村を除く全町村において（[表６]），浦河支庁管内では，三石，幌泉村を除く全町村において，政友会の得票が民政党を上回っている（[表７]）。

視点を換えて，候補者別の得票数から，選挙結果を検討する。室蘭市に着目すると，政民両党は，集票に成功していない（[表１]）。民政党においては候補者調整のため，岡本が出馬を辞退したが，室蘭民政倶楽部は「岡本あつての民政倶楽部だ。然るに，神部を推せとは僭越ではないか」と反発した。政友会においても，室蘭政友倶楽部は板谷を推薦したが，室蘭市出身の南条も立候補した[34]。南空知地方では，民政党が岩見沢町と三笠山村において山本，美唄町において岡田，政友会が幌向，月形村において松実，由仁村において板谷に集票した。松実への集票は成功していない。中空知地方では，民政党が滝川町と新十津川村において神部，政友会が江部乙，新十津川，雨竜村において松実に集票した。北空知地方では，民政党が一己村において岡田，

政友会が幌加内村において松実に集票した[35]。だが，上記の町村以外では，政民両党ともに同士討ちとなった。昭和恐慌を招来した民政党の金再禁政策批判[36]に対する農村の有権者の反発は強く，政友会を利することになった。胆振支庁管内では，民政党が伊達町と徳舜瞥，虻田，洞爺，壮瞥，幌別，弁辺，穂別村において手代木，政友会が虻田，洞爺，徳舜瞥村において板谷に集票した。浦河支庁管内では，民政党が全町村において手代木，政友会が右左府，平取，荻伏，様似村において板谷に集票した[37]。胆振，浦河支庁管内において，民政党は手代木，政友会は板谷への集票傾向にあったことがわかる。

ここで着目したいのは，政友会における南条の擁立過程である。南条は「昭和七年に犬養内閣で初めて郷里の北海道で立候補したが，このときは政友会の幹事長の森恪氏から私に公認するから東京で選挙をやれといわれた。だけど選挙区というものは，東京は非常に弱い。やりにくいというのを自分は経験上わかっているので，どうせ選挙をやるならば田舎のほうに選挙区を持ったほうがいいというので，森幹事長のすすめを断って，私は北海道の先輩木下成太郎代議士を頼って北海道第四区で立候補した」，「無理をして郷里の選挙に割り込んだものだから，対立候補にじゃまされて初めは党の公認がもらえなかったが，結局，選挙戦中に追加公認を受けた。選挙は，いまに比べたらのん気なもので，初めて立ったのに胆振管内と苫小牧付近を回ったていど，空知には全然入らなかった」と回想している[38]。南条に立候補を進めたのは森幹事長，北海道からの出馬を支援したのは木下支部長だった。南条の擁立は，本部と支部が一体となって進めたのである。南条の公認に対立候補（板谷と松実）からの妨害があったように，本部の意思は支部の統制を混乱させる場合があった。南条自身が回顧しているように，第３回普通選挙において南条は出遅れており，板谷と松実に脅威を与えることはなかった。

1932 年２月の第３回普通選挙において，政友会は各地で大勝したが，南空知地方は民政党が優位な得票を得た。だが，選挙後の政友会は選挙の結果と関係なく，多数派工作を行った。1936 年１月 25 日の『小樽新聞』は「山本君は当選後，党籍を変更して政友会に寝返りを打つてしまつたのと，中立の松尾君が政友に抱き込まれたので，結局，政友は四名を占め，民政はわづかに

手代木君一人となってしまつた」,「選挙民直接の意思表示は政民五分五分で，政友会が五人の定員中四人まで占めるに至つたのは選挙民とは何等関係なく，選挙後に至つて，だき込み工作が成功したといふまでの話である」と評している[39]。政党内閣時代の南空知地方では，有権者の意向が選挙結果に反映されることはなかったのである。

第２章　政党内閣崩壊後における北海道第４区

第１節　1936 年２月の第４回普通選挙と北勝太郎の当選

第４回普通選挙（岡田啓介内閣が実施）において，岡田内閣の与党の民政党は前代議士の手代木，元代議士の岡田が１，２位当選，新人の深沢吉平（道議，農業，音江村）が４位当選を果たした。民政党の候補者３人がいずれも当選を果たしたことと対照的に，野党の政友会は７候補を濫立し，初当選の南条の１議席に終わった。板谷，松尾，松実，山本（いずれも前代議士），新人の東英治（非公認，道議，新十津川村）は落選した。中立の北勝太郎（道議，農業，砂川町）は，５位で初当選を果たしている。中立の赤松克麿（国民協会党首，著述業，山口県出身）は同志の菅俊英の援助によって立候補したが，７位で落選した。赤松は宮崎１区から２度立候補し（第１，２回普通選挙），いずれも落選していた[40]。赤松が北海道第４区を選択したのは，空知地方における二大政党の地盤が不安定と見て取ったからだろう。

政党別得票結果に着目すると，室蘭市と空知支庁管内では政友会，胆振，日高支庁管内では民政党が上回った（[表２]）。南空知地方に着目すると，美唄町と北，由仁，月形村において民政党，岩見沢，夕張町と栗沢，幌向，長沼，角田，三笠山村においては政友会が上回った（[表３]）。南空知地方における政友会の得票の合計は 15,108 票で，11,078 票の民政党を上回った（「その他」は 6,018 票）。過去３度の普通選挙において，政友会が南空知地方において民政党を上回ったことはない。政友会の多数派工作の結果，南空知地方から民政党の党勢は後退したのである。中空知地方に着目すると，滝川町と歌志内，赤平，芦別，江部乙村において民政党，新十津川，雨竜村において

政友会が上回った。北の地元の砂川町と浦臼村では「その他」の得票数が政民両党を上回っている（[表４]）。中空知地方における政友会の得票の合計は6,059票で，5,851票の民政党を上回ったが，同志討ちのために候補者の当選に結びついていない（「その他」は4,668票）。北空知地方に着目すると，深川町と音江，一己，納内，多度志，妹背牛，秩父別，沼田村において民政党，幌加内村において政友会が上回った。北竜村では「その他」の得票数が政民両党を上回っている（[表５]）。北空知地方における民政党の得票の合計は5,191票で，3,511票の政友会を上回った（「その他」は2,248票）。中空知，北空知地方において，「その他」の得票は過去３回の普通選挙を大きく上回った。胆振支庁管内では，苫小牧，伊達町と徳舜瞥，虻田，壮瞥，豊浦村において民政党，厚真，洞爺，幌別，鵡川，穂別，白老村において政友会が上回った。菅の地元の安平村では「その他」の得票数が政民両党を上回っている（[表６]）。日高支庁管内では全町村において，民政党が政友会を上回った（[表７]）。

ここで，候補者別の得票数から，選挙結果を検討する。室蘭市に着目すると，民政党は手代木と岡田，政友会は南条が得票を伸ばしている（[表２]）。前回選挙と対照的に，南条の進出の前に，板谷は落選した（板谷は深沢の選挙違反の結果，繰り上げ当選）。南条は広田弘毅内閣において，前田米蔵鉄相（政友会領袖の中島知久平の参謀）の秘書官を務めることになる[41]。板谷は前田と対立する鳩山一郎と近く[42]，南条と板谷の競合は後年の政友会分裂の一側面として重要だろう。

南空知地方に着目すると，民政党は岩見沢，美唄町と三笠山，角田村において岡田，政友会は岩見沢町において山本，夕張町において松尾に集票した。政友会は候補者乱立のため，豊富な得票を候補者の当選に結びつけることができなかったのである。他方で，民政党は岡田が地元の美唄町と栗沢，由仁，角田，三笠山村において得票数１位となり，２位当選を果たした。中空知地方に着目すると，民政党は砂川町において岡田，滝川町，芦別，江部乙，新十津川村において深沢，政友会は新十津川村において東に集票した。北空知地方に着目すると，民政党は深川町，音江，一己，納内，多度志，妹背牛，

秩父別村において深沢に集票したが，政友会は集票に成功していない。中空知，北空知地方における民政党の勝因が深沢への集票にあったことは明らかである。胆振支庁管内に着目すると，民政党は全町村において手代木，政友会は虻田村において板谷，幌別，白老村において南条に集票した。日高支庁管内では民政党が全町村において手代木，政友会が右左府，三石，荻伏，様似村において板谷に集票した[43]。１位当選の手代木の勝因は，胆振，日高支庁管内における集票にあった。このように，民政党は神部から深沢への世代交代に成功した。だが，神部は深沢ではなく，岡田を支援していた。深沢の支持者によると，神部の立場は「せっかく自分のためにつくしてくれた深沢のことだから，自分の子に財産を渡すようにして，選挙地盤を渡したかったが，深沢自身が挨拶なしに，いきなり公認を受けて立候補したのは面白くない」というものだった[44]。前代議士の神部からの支援が弱いにもかかわらず，深沢が当選できたのは個人への支持票が大きかったように思われる。

深沢は北海道製酪販売組合連合会（現在の雪印メグミルク）の中心人物であり，音江村農会長及び産業組合長として経済更生計画を立案した。深沢は「全国酪農大会出席のため帝国農会に行く。北海道酪農家を代表して演説」と，1934 年 1 月 26 日の日記に記している[45]。ここで着目したいのは，深沢と北が酪農の指導者という共通の経歴を持っていることである。北は空知農業学校出身で，北海道信用購買販売組合連合会（現在のホクレン）理事や空知郡農会会長を務めた経歴があり，1918 年から奈井江が分村する 1944 年まで，砂川町農会長として，農業の経営改善（畜産指導）に尽力した[46]。昭和恐慌によって乳価は下落し，酪農家は大きな打撃を受けた。北海道庁では酪農経営合理化運動を起こし，各町村に酪農組合を結成するように指導していたが，北はこれに呼応して砂川町（現在の奈井江町）において奈井江酪農振興会を結成し，困窮する酪農家の指導に着手していた[47]。

1936 年 2 月 1 日の『北海タイムス』は「農民層から北，深沢の両氏が登場し，此管内の大部分が農民層を以て組織されている丈に，農民層の候補からヒタ押しに大票田空知へ突入」と報じている。18 日の同紙は，北について「産業組合の動きと管内農村の中堅人物として散在する空知農業学校出身者が先

輩を支へて居るとする動きは以外の努力となつて現れつつあり，恐れるべき候補で他に伝へられて居る」と評している[48]。第 4 回普通選挙において，深沢は滝川，深川町と歌志内，芦別，江部乙，音江，一己，納内，多度志，妹背牛，秩父別村において，北は砂川町と北，長沼，浦臼，雨竜，沼田，北竜村において得票数 1 位となった[49]。このように，空知地方の農村票の大部分は政友会から，経済更生運動の指導者の深沢と北に移行していたのである。

ここで視点を換えて，赤松の動向に着目したい。1933 年 7 月，赤松は国家社会党の内部対立（平野力三ら国家社会主義派と赤松ら日本主義派）の結果，国民協会の結成へと追いやられた。1934 年 7 月の岡田内閣成立を機に，赤松は右翼勢力の結集に転じる。赤松と平野は「維新懇話会」を結成し，岡田内閣反対の申し合わせを行った 1936 年 2 月の第 4 回普通選挙に際して，赤松は「愛国団体選挙闘争委員会」（平野の皇道会も参加）を組織した。2 月 14 日の『小樽新聞』は「新日本主義を振りかざして入り込んだ赤松候補は往年の闘士，菅俊英氏自ら事務長となつて相手かまはず，挑戦してファッショの波に乗つて室蘭，苫小牧，夕張，美唄の工場，炭山地帯に乗り込み，演説会における大衆動員に目覚ましきものあり，新人らしいところを見せている。それに加へて同候補には徳富蘇峰氏，西本願寺の太谷尊由氏，又在郷軍人側の菊池武夫男，等々力森蔵中将等の鳴り物入りの推薦状がとび，或ひは全国農民組合空知支部がこれ又，同候補を支持して農民動員に可なりの効果を挙げているらしく，他候補の強敵たることは免れない」と評している[50]。赤松が北海道を選挙区に選択した背景には，社会民衆党時代からの同志の菅の支援があったことがわかる。野党の立場からの付け焼刃の「日本主義統一運動」が赤松の当選をもたらすことはなかった。しかし，赤松は直後に「二月会」を結成，中野正剛や渡辺泰邦ら東方会と提携し，「革新的諸勢力の結集」を企図する[51]。赤松は非政民勢力を結集させることで，幅広い有権者からの支持を増やそうという戦略を継続する。

1936 年 2 月の第 4 回普通選挙において，政友会の得票は南空知地方において民政党を初めて上回った。だが，政友会は政党内閣時代の民政党と同様，豊富な得票を候補者の当選に結びつけることができず，中空知，北空知地方

においても党勢を後退させた。1937 年 4 月の第 5 回普通選挙では，空知地方の有権者の政党不信が赤松の進出を後押しすることになる。

第 2 節　1937 年 4 月の第 5 回普通選挙と赤松克麿の台頭

第 5 回普通選挙（林銑十郎内閣が実施，既成政党批判を掲げて議会解散。二大政党は野党）において，民政党は前代議士の手代木と岡田が 2，4 位当選を果たしたが，前回当選の深沢と元代議士の岡本（道議）が落選し，1 議席を減じた。政友会は松尾（元代議士），山本（元代議士），東が揃って落選，5 位当選の南条（前代議士）の 1 議席に終わった。中立の北（前代議士）は 3 位当選，国民協会の赤松は前回選挙から得票を倍増させ，1 位当選を果たした（[表 1]）。

政党別得票結果に着目すると，室蘭市，胆振，日高支庁管内では民政党が政友会を上回り，空知支庁管内では「その他」の得票が政民両党を上回った（[表 2]）。南空知地方に着目すると，美唄町と北，月形村において民政党，岩見沢，夕張町と幌向，長沼村において政友会が上回った。栗沢，由仁，角田，三笠山村においては，「その他」の得票が政民両党を上回っている（[表 3]）。南空知地方における政友会の得票の合計は 12,593 票で，8,027 票の民政党を上回った。「その他」の得票は 10,293 票で，民政党を上回っており，同党の後退は顕著である。中空知地方に着目すると，滝川町と芦別村において民政党，新十津川村において政友会が上回った。北の地元の砂川町と歌志内，赤平，江部乙，浦臼，雨竜村では「その他」の得票数が政民両党を上回っている（[表 4]）。中空知地方における「その他」の得票は 6,532 票で，4,397 票の民政党と 4,226 票の政友会を上回った。政民両党はともに北に圧迫されている。北空知地方に着目すると，深川町と音江，一己，納内，多度志，秩父別村において民政党，幌加内村において政友会が上回った。妹背牛，沼田，北竜村では「その他」の得票数が政民両党を上回っている（[表 5]）。北空知地方における民政党の得票の合計は 4,729 票で，1,941 票の政友会を上回った。「その他」の得票は 3,496 票で，政友会を上回っている。北空知地方では政友会が後退した。胆振支庁管内では，苫小牧，伊達町と徳舜瞥，虻田，洞

爺，壮瞥，幌別，豊浦村において民政党，鵡川，穂別，白老村において政友会が上回った。厚真，安平村では，「その他」の得票数が政民両党を上回っている（[表６]）。日高支庁管内では全町村において，民政党が政友会を上回っている。荻伏村では「その他」の得票数が政民両党を上回った（[表７]）。

ここで，候補者別の得票数から，選挙結果を検討する。室蘭市に着目すると，民政党は岡本，政友会は南条に集票している。1937 年 4 月 27 日の『北海タイムス』は「赤松候補も亦，室蘭の得票は昨年のやうな成績は期待出来ない」と評していたが[52]，室蘭市における赤松の得票は前回選挙から増大し，岡本，南条に次ぐ３位だった（[表２]）。４月 10 日の『北海タイムス』は民政党の岡本擁立について，「多年，室蘭市を有力な地盤としていた板谷順助氏が第一区へ廻り，少なからぬ浮動票を生じたことを初め，工場地帯の投票が赤松候補，其他に流れ出るを喰ひ止めんとする策戦もある」と評していたが[53]，岡本は赤松の進出の前に落選した。政友会では，南条が連続当選を果たしている。後年，南条は「北海道庁の土木部長に植木寿夫という先輩がおって，この人が政友会の森幹事長の知遇を受けておった人であった。そういう関係で，当時の北海道は開拓事業が旺盛な時代でありますので，土木部長の権限は非常に強かった。なかんずく建築，土木業者には影響力が大きかった。この植木さんが私の選挙運動のためにたいへん力を貸してくれて，選挙区各地の土建屋，たとえば日高の谷万吉，松川嘉太郎，その他の建設協会の御歴々に南条を応援しろという声をかけてくれたので，私が地方の開発に力を尽くすときにたいへん助けになった。昭和十一年の選挙当選後もこういう関係で建築協会の御歴々に力強く応援してもらったのであります。これは土木部長の植木寿夫さんのおかげだと心から感謝しております」と回顧している[54]。板谷が北海道第１区に選挙区を変更したのは，４区では南条に勝利する可能性が低いと考えたためと思われる。

南空知地方に着目すると，民政党は岩見沢，美唄町と角田，三笠山村において岡田，幌向村において深沢，政友会は岩見沢町と北，三笠山村において山本，幌向村において東，夕張町において松尾に集票した。民政党が岡田への集票を当選に結びつけたことに対して，政友会は候補者間の同志討ちのた

め，豊富な得票を活かすことができていない。中空知地方に着目すると，民政党は砂川町において岡田，滝川町と芦別，江部乙，浦臼，新十津川，雨竜村において深沢，政友会は滝川町と芦別，江部乙，浦臼，新十津川，雨竜村において東に集票した。北空知地方に着目すると，民政党は深川町と音江，一已，納内，多度志，妹背牛，秩父別村において深沢，政友会は深川町と音江，納内，妹背牛，秩父別，幌加内，北竜村において東に集票した。中空知，北空知地方において民政党は前回選挙同様，深沢に集票したが，得票を伸ばすことができず，深沢は落選した。政友会は候補者調整に失敗した前回選挙と異なり，地元候補の東に集票したが，東は落選した。胆振支庁管内に着目すると，民政党は安平，幌別村を除く全町村において手代木，政友会は伊達町と徳舜瞥，洞爺，壮瞥，幌別，豊浦，鵡川，白老村において南条に集票した。日高支庁管内に着目すると，民政党は全町村において手代木，政友会は静内，浦河町と平取，幌泉村において南条，荻伏，様似村において松尾に集票した。胆振，日高支庁管内における政民両党の集票が手代木と南条の当選の背景にあった。中立の北は地元の砂川町と長沼，由仁，角田，江部乙，浦臼，沼田，北竜，厚真，荻伏村において得票数１位となっており[55]，空知農村の支持を受けていることがわかる。

民政党の深沢の落選の背景には，第４回普通選挙における選挙違反事件があった。1937 年２月 18 日，深沢は選挙違反のため，大審院によって当選無効となった。深沢の選挙事務長の岡本昌訓は，深沢の伝記の中で「選挙がすんで，数日たつと，長沼，幌向，岩見沢，夕張，滝川，深川から吉平の選挙参謀をつとめた幹部級がどしどし拘引されだした」，「各町村の違反に関係したる参謀連は，いずれも商店主，獣医師など町村の有力者であり，かつ，老体の人が多いので，北海道での下獄服役は健康保持が難しいから，判決前に本籍を東京に移してあったのでそれぞれ上京して服役したのである」，「幹部級は全部，服役中であり，目前に迫った選挙戦，しかも苦戦はまぬがれがたい状況」にあったと回想している[56]。一方で民政党は岡田が当選したが，息子の岡田春夫（２代目）の回想によると，岡田は同党反主流派の永井柳太郎や風見章（1937 年，第１次近衛文麿内閣書記官長。1940 年には政党解消運動

を推進する）と親しかったと言う[57]。永井は同郷（石川県）の林首相と個人的に親しく，組閣直後は林内閣を擁護していた。だが，町田忠治総裁の主導で，民政党は倒閣を選択した[58]。空知地方における岡田個人の支持勢力の中には，民政党の現状に否定的な有権者も多数含まれていたように思われる。

他方，政友会は，第 3 回普通選挙後における山本の党籍変更，中立の松尾の入党など，選挙と無関係な多数派工作を行っていた。岡本昌訓は深沢の公認に際して「民政党総務大麻唯男の名をもって，公認料が七千円」送金されたため，「第四区の法定選挙費用は四千円前後であり，その倍額に近い公認料がくることの不可思議さと「政党」という呼名からくる非情の感じに似合わない温情すら感じたのである」と回想している[59]。松尾にとっても，政友会からの公認料は魅力的だったように思われる。だが，政友会は第 4 回普通選挙において，南空知地方から豊富な得票を獲得しながら，同党公認候補として山本と松尾を当選させることができなかった。第 5 回普通選挙においても，山本，松尾，東という空知地方の政友会候補は全て落選した。

以上のことから，二大政党に対する空知地方の有権者の信頼は低下していたと思われる。ゆえに，赤松の既成政党批判は効果を発揮した。例えば，1937 年 4 月 21 日の『小樽新聞』は「赤松候補が道南候補の一番乗りとして二十日，岩見沢町に駒を進め，既成政党排撃のスローガンを掲げて「大衆よ。既成政党の甘言に踊るなかれ。速に新興勢力の国家的重要性を認識すべし」とばかり，声をからして絶叫」したことを報じている[60]。赤松は議会進出のための単一政党の結党を企図していた。1936 年 12 月 15 日，労農諸団体，日本主義政治団体を一丸とし，「全日本主義陣営の常設協議機関」を標榜した時局協議会が結成され，赤松は調査部員に就任していた。赤松ら時局協議会内の議会進出，即時結党派は東京市会議員選挙直前の 1937 年 2 月 24 日，日本政治革新協議会（政革）を結成し，第 5 回普通選挙に対処した。林内閣の与党を自任した政革は，有利な状況下での解散として総選挙に臨んだ（13 人が立候補し，赤松を含む 5 人が当選）[61]。「既成政党粉砕」を掲げる政革は林首相の新党工作に期待しており[62]，この点が同内閣を批判していた東方会の渡辺泰邦と異なる。

［表８］　第５回普通選挙における赤松克麿の得票上位町村

栗沢村	574 票（330 票）	１位（３位）
三笠山村	1,512 票（546 票）	１位（３位）
歌志内村	793 票（374 票）	１位（３位）
赤平村	414 票（236 票）	１位（３位）
安平村	564 票（529 票）	１位（１位）
岩見沢町	375 票（336 票）	２位（４位）
夕張町	1,727 票（858 票）	２位（２位）
砂川町	940 票（470 票）	２位（３位）
苫小牧町	1,035 票（548 票）	２位（３位）
音江村	60 票（ 21 票）	２位（５位）
沼田村	208 票（ 53 票）	２位（７位）

（注）前掲「第二十回衆議院議員総選挙一覧」，前掲「第十九回衆議院議員総選挙一覧」から作成。かっこ内は第４回普通選挙の得票数と順位を示す。

1937 年４月の第５回普通選挙において，赤松は，空知支庁管内における産炭地（夕張，砂川町，栗沢，三笠山，歌志内，赤平，沼田村）において，前回選挙から得票を激増させている（［表８］）。前回選挙時点から，帝国在郷軍人会は赤松を支援していた。ここでは，空知地方の産炭地における在郷軍人会の分会を概観する。三笠山村では 1907 年，「幌内分会」，「幾春別分会」，「市来知分会」が設立された。『新三笠市史』によると，「各炭坑の盛況に伴い在郷軍人が増加し，大正六年に奔別分会，超えて昭和三年弥生分会，同六年には唐松分会，八年新幌内分会ができた。七年には，三笠山連合分会が結成された」と言う[63]。栗沢村では 1933 年において，「栗沢分会」が会員数 320 人，「万字分会」が会員数 235 人，「美流渡分会」が会員数 43 人だった[64]。歌志内村では同年 12 月 10 日，「歌志内村分会」から「住友歌志内分会」が分立した[65]。砂川町では 1910 年に「砂川分会」と「奈井江分会」，1919 年に「三井砂川鉱業所分会」が発足した[66]。夕張町では 1918 年 10 月 31 日，連合分会（「夕張炭

山連合分会」,「夕張分会」,「大夕張分会」,「真谷地分会」,「登川分会」,「滝の上分会」）が発会した。1932 年 8 月 20，21 日には連合分会の主催で初の防空演習が行われたが，演習は「在郷軍人，青訓生徒，婦人会，町内会その他諸会社から参加する者六四〇八名に及び現役将校下士官平など六〇名という大々的」なものだったと言う[67]。空知地方の炭鉱の発展は在郷軍人会の分会の拡大と一体の関係にあった。

なお，第 1 回普通選挙における壇野の当選が示すように，空知地方の炭鉱の大部分を有する三井財閥は選挙戦に影響を及ぼす存在だった。林内閣の結城豊太郎蔵相は「軍財抱合」財政を打ち出し，財閥に批判的だった軍部は軍備拡張のために財閥の経済力に頼る路線を選択し，軍事化に消極的だった財閥は軍需産業への進出を開始した[68]。第 5 回普通選挙において，軍部と財閥との関係は，高橋財政の下で実施された前回選挙から決定的に変化していた。赤松の進出の背景には，空知地方の産炭地における在郷軍人会の分会と三井財閥の合流があったように思われる。

1937 年 7 月 18 日，赤松は政革を改組し，日本革新党を組織する（菅は結党大会の副議長）。日本革新党の「十大政策」には「労働者最低生活水準の確保」が掲げられた。1939 年 11 月 26 日，赤松は国民同盟や東方会の代議士とともに院内団体の時局同志会を結成，革新政党結党のために政友会中島派に接近した。1940 年 3 月 25 日，時局同志会は聖戦貫徹議員連盟（赤松は企画部員兼連絡部員）へと発展解消し，「反軍演説」を行った斎藤隆夫の追放を推進する。近衛新党運動を推進するなど，代議士としての赤松は中央政治において看過できない役割を果たしたが，それに傾注したために道央南東部の有権者の要請に対応する政策を実行することはなかった[69]。

結

1937 年 4 月の第 5 回普通選挙において，二大政党からの有権者の離反が北海道第 4 区の中で顕著に現れたのは，空知地方だった。南空知地方は政党内閣期において民政党の地盤だったが，選挙と関係がない多数派工作によって，

1936 年２月の第４回普通選挙以降は政友会の地盤となった。だが，二大政党はともに地方組織の集票機能が弱く，候補者間の同士討ちとなり，豊富な得票を候補者の当選に活かすことができなかった。このことは有権者の不満を蓄積させたことだろう。中選挙区制下における同一政党候補の競合は，第５回普通選挙において既成政党批判を掲げる赤松克磨の進出の前提として重要である。政党内閣期において二大政党の勢力が拮抗していた中空知地方，政友会の地盤だった北空知地方においては，第４，５回普通選挙における中立の北勝太郎の進出に象徴されるように，農村票が政友会から離反していた。政友会では第１，２，３回普通選挙において連続当選した松実喜代太が第４回普通選挙において落選し，松実と同一地盤の東英治もまた，第４，５回普通選挙において落選した（[表１]）。

室蘭市，胆振，浦河（日高）地方では二大政党の影響力が根強かった。民政党は 1928 年２月の第１回普通選挙こそ落選したが，手代木が第２回普通選挙以降，同地方で安定的な得票を獲得し，連続当選を果たした（[表１]）。1936 年２月の段階において，手代木は「今日では次期民政党総裁をネラフ永井柳太郎氏を囲繞するメムバーの１人である」と評されており[70]，1940 年７月の近衛新党運動では，北海道選出代議士の中で唯一人，民政党を脱党する[71]。政友会は政党内閣期の第１，２，３回普通選挙において板谷順助，政党内閣崩壊後の第４，５回普通選挙において南条徳男が連続当選を果たした（[表１]）。1939 年５月の政友会分裂において板谷は久原派，南条は中島派に所属し，袂を分かつ。1937 年４月の第５回普通選挙において，二大政党は室蘭市や苫小牧町において赤松の進出を許したが，手代木と南条の地盤の大部分は動揺しなかった。民政党が政友会に大敗した 1932 年２月の第３回普通選挙を除き，民政党は政友会に対して優位に立った。民政党は空知地方において党勢を後退させる一方で，太平洋側の地域では党勢を保持した[72]。

1942 年４月の翼賛選挙（東条英機内閣下で実施）において北海道第４区から当選するのは，手代木（推薦），北（非推薦），南条（推薦），深沢吉平（推薦），三井財閥の星野靖之助（推薦）である。赤松は非推薦で立候補し，落選した。北が 18,325 票を獲得したことに対して，赤松は 7,545 票を獲得した

にすぎなかった。旧政友会の村田要助（道議）は推薦候補でありながら，落選した[73]。赤松の落選は，北海道政治を閑却した代償であったように思われる。北は空知の「農民代表」[74]として，二大政党の地盤を切り崩すことに成功したが，手代木と深沢（旧民政党）と南条（旧政友会）の当選に象徴されるように，旧二大政党の地盤の大部分は戦中期においても健在だった。なお，深沢は元民政党北海道支部長の山本厚三の側近だった[75]。他方，手代木（永井派）と南条（政友会中島派）が二大政党の側から近衛新党運動を推進していったことに着目すると，道央南東部における「革新」勢力の地盤は戦前期から強固であったと言える。

注

1　拙著『戦前期北海道政党史研究』北海道大学出版会，2019 年，206，212，213 頁。
2　北海道大学附属図書館所蔵マイクロフィルム『北海タイムス』を『北タイ』，北海道大学附属図書館所蔵マイクロフィルム『小樽新聞』を『樽新』，函館市中央図書館所蔵（縮刷版）『函館新聞』を『函新』と略記し，年月日のみ表記する。
3　『北タイ』（1928 年 2 月，24，6 日）。
4　赤松克麿については，伊藤隆「「挙国一致」内閣期の政界再編成問題（三）」『社会科学研究』（27-2）1975 年，田中真人「日中戦争下の国家主義団体」『社会科学』（22）1977 年，伊藤隆『大政翼賛会への道』講談社，2015 年（初版 1983 年），渡部亮「「大正デモクラシー」の政党化構想のゆくえ」『史学雑誌』（128-8）2019 年などの研究蓄積があるが，国民協会時代の赤松と地方政治についての検討は残された課題となっている。
5　奈井江町百年史編さん委員会編『奈井江町百年史』（上巻・通史編）奈井江町役場，1990 年，415 頁。
6　有馬学「日中戦争期の「国民運動」」『年報・近代日本研究（5）昭和期の社会運動』山川出版社，1983 年，57 頁。
7　空井護「自民党支配体制下の農民政党運動」北岡伸一，御厨貴編『戦争・復興・発展』東京大学出版会，2000 年，271 頁。
8　小林の北連への引き出し工作を行ったのは北だった（佐々木治夫『小林篤一伝』北海道協同組合通信社，1973 年，104，105 頁）。
9　北海道第 4 区と対照的に，熊本第 1 区では二大政党の地方組織が集票によって，同一政党候補による同士討ちを避けることに成功している（浅野和夫「戦前総選挙におけ

る集団投票」『大麻唯男』（論文編）櫻田会，1996 年）。政党の地方組織に関しては，山室建徳「一九三〇年代における政党基盤の変貌」日本政治学会編『近代日本における中央と地方』岩波書店，1985 年，奥健太郎『昭和戦前期立憲政友会の研究』慶應義塾大学出版会，2004 年を参照。

10 北海道第 1 区に関しては拙稿「昭和戦前期の普通選挙と北海道第 1 区」『道歴研年報』（20）2019 年，第 2 区に関しては拙稿「昭和戦前期の北海道第 2 区における政党間競合」『北大文学研究院紀要』（158）2019 年を参照。北海道第 3 ，5 区に関しても別稿を用意している。

11 内務省警保局「改正法ニ依ル第一回総選挙予想調査」1926 年，『復刻版　昭和初期政党政治関係資料』（第 1 巻）不二出版，1988 年，17，20～22 頁。

12 前掲「第十六回衆議院議員総選挙一覧」。

13 谷村金次郎『北海道地方政党盛衰記』室蘭毎日新聞社，1935 年，251～253 頁。

14 静内町編さん委員会編『増補改訂　静内町史』（下巻）静内町，1998 年，510 頁。

15 『北タイ』（1928 年 2 月 13 日）。

16 室蘭民政倶楽部は，1 月 26 日に岡本の推薦を決定していた（『北タイ』（1928 年 1 月 27 日））。

17 『北タイ』（1928 年 2 月 6 日）。手代木は岡本によって苫小牧町における得票を奪われている（前掲・拙著『戦前期北海道政党史研究』95 頁）。

18 『北タイ』（1928 年 2 月 13 日）。

19 『北タイ』（1928 年 2 月 1 日），『樽新』（1928 年 2 月 1 日，17 日）。

20 美唄史百年史編さん委員会編『美唄市百年史』（通史編）美唄市役所，1991 年，254，253 頁。

21 落選直後の木田は「私共は選挙運動を以て私共が日常行ふ私共の此声に賛成したものが四千三百人あつた，といふ事は如何に労働農民党の主張が正しいかといふ事，若しも買収其他の選挙の公正を害する行為が他の候補者になかつたならば，更に共鳴者が増加し，私共は当選をも勝ち得たであらう事を信じた，私はどうしても敗けたといふ感じが起きて来ない」と語っていた（北海道第四区（労農）　木田茂晴」国立国会図書館憲政資料室所蔵，宮武茂平編「普選第一次敗将の語らひ」（請求番号 587-20）310 頁）。

22 前掲「第十六回衆議院議員総選挙一覧」。

23 『北タイ』（1928 年 2 月 24 日）。

24 前掲「第十六回衆議院議員総選挙一覧」。

25 『樽新』（1930 年 2 月 3 日）。

26 前掲「第十七回衆議院議員総選挙一覧」。

27 『樽新』（1930 年 1 月 30 日）。

28 前掲「第十七回衆議院議員総選挙一覧」。

29 『北タイ』（1930 年 1 月 28 日，2 月 4 日）。
30 岡本昌訓『深沢吉平の生涯』深沢吉平伝刊行会，1964 年，109 頁。
31 前掲「第十七回衆議院議員総選挙一覧」。
32 栗山町史編纂委員会編『栗山町史』（前編）栗山町，1989 年，596 頁。
33 『北タイ』（1932 年 2 月 8 日）。
34 『北タイ』（1932 年 2 月 11 日，1932 年 1 月 30 日）。
35 前掲「第十八回衆議院議員総選挙一覧」。
36 前掲『樽新』（1932 年 2 月 4，10 日）。
37 前掲「第十八回衆議院議員総選挙一覧」。
38 南条徳男先生回想録刊行委員会編『南条徳男先生回想録』大東文化学園，1978 年，17，73 頁。
39 『樽新』（1936 年 1 月 25 日）。
40 前掲・渡部「「大正デモクラシー」の政党化構想のゆくえ」『史学雑誌』（128-8）9，11 頁。
41 前掲『南条徳男先生回想録』18 頁。
42 前掲・拙著『戦前期北海道政党史研究』222 頁。
43 前掲「第十九回衆議院議員総選挙一覧」。
44 前掲・岡本『深沢吉平の生涯』110 頁。
45 「深沢吉平日記」（1934 年 1 月 26 日）前掲・岡本『深沢吉平の生涯』110 頁。
46 前掲『奈井江町百年史』（上巻・通史編）415 頁。
47 奈井江町史編さん室編『奈井江町史』奈井江町役場，1975 年，459，460 頁。
48 『北タイ』（1936 年 2 月 1，18 日）。
49 前掲「第十九回衆議院議員総選挙一覧」。
50 『樽新』（1936 年 2 月 14 日）。
51 前掲・伊藤「「挙国一致」内閣期の政界再編成問題」53，54 頁，103～107 頁。
52 『北タイ』（1937 年 4 月 27 日）。
53 『北タイ』（1937 年 4 月 10 日）。
54 前掲『南条徳男先生回想録』56 頁。
55 前掲「第二十回衆議院議員総選挙一覧」。
56 前掲・岡本『深沢吉平の生涯』111，112 頁。
57 岡田春夫『国会爆弾男・オカッパル一代記』行研出版局，1987 年，9 頁。
58 拙著『立憲民政党と政党改良』北海道大学出版会，2013 年，217 頁。
59 前掲・岡本『深沢吉平の生涯』114，115 頁。
60 『樽新』（1937 年 4 月 6 日）。
61 前掲・田中「日中戦争下の国家主義団体」222～225 頁。前掲・伊藤「「挙国一致」内閣期の政界再編成問題（三）」54 頁。

62 『函新』（1937 年 4 月 9 日）。
63 三笠市編さん委員会編『新三笠市史』（通史編）三笠市，1993 年，347，348 頁。
64 稲童丸謙二編『栗沢町史』空知郡栗沢町役場，1964 年，658，659 頁。
65 歌志内市史編さん委員会編『歌志内市史』歌志内市役所，1964 年，366 頁。
66 砂川市史編さん委員会編『私たちの砂川市史』（上巻）砂川市役所，1991 年，522 頁。
67 夕張市史編さん委員会編『改訂増補　夕張市史』（下巻）夕張市役所，1981 年，69，70 頁。
68 三和良一『概説日本経済史』（第 3 版）東京大学出版会，1993 年，143 頁。
69 前掲・田中「日中戦争下の国家主義団体」227，229，252，253，255，258，259 頁。
70 函館市中央図書館所蔵，茶碗谷徳次『人物覚書帳』事業と人社，1936 年，565，566 頁。
71 前掲・拙著『戦前期北海道政党史研究』224 頁。
72 北海道第 1 区においても民政党の強固な地盤が確認される（前掲・拙稿「昭和戦前期の普通選挙と北海道第 1 区」）。
73 「第二十回衆議院議員総選挙一覧」（衆議院事務局，1942 年）。
74 空知地方の有権者の「農民代表」という政治意識は 1990 年代まで継承される（北海道新聞政治部編『北海道政治地図』太陽，1991 年，29 頁）。
75 前掲・茶碗谷『人物覚書帳』567，568 頁。

Universal Suffrage in the Pre-war Era of the Showa period and the Fourth Constituency of Hokkaido

Inoue Keisuke

This paper is a sequel to my paper “Universal suffrage in the pre-war era of the Showa period and the fourth constituency of Hokkaido”, consider course of changes of the competition between two-parties in the fourth constituency of Hokkaido in the pre-war era of the Showa. This paper revealed the facts that political situation of the center of Hokkaido changed over from two-parties to many-parties age.

Firstly, the voter in the fourth constituency of Hokkaido in the pre-war era of the Showa voted for the local candidate.

Secondly, the candidate of the same political party practiced a scramble for a vote in one town and one village in the fourth constituency of Hokkaido in the pre-war era of the Showa.

Thirdly, this paper discovered that Akamathu Katumaro and kita kathutaro challenged two-parties in the fourth constituency of Hokkaido in the pre-war era of the Showa.

Examples of the fourth constituency of Hokkaido in the pre-war era of the Showa prove the importance in the research on universal suffrage in the pre-war era of the Showa period and political parties.